

親字五万余字、熟語五三万余語を収録した大漢和辞典。

この、まさに世界に誇る漢字・漢語の金字塔を、

『広辞苑の中の掘り出し日本語』でおなじみ

永江朗さんが掘り出します。

永江朗さんと

“掘り出す”

大漢和辞典



『大漢和』を手に入れてまっさきに探してみたかったのは、画数がいちばん多い漢字だ。「1」はそのひとつ。総画数、64。「龍」の部の48画。「龍」が4つである。けつこう有名な字で、高校生のとき学校の図書室でこの字を引いた経験がある人も多いだろう。旧仮名で「テツ」「テチ」とある。

ドラゴンが4匹もいるのだから、さぞや勇ましい意味なのだろうと想像する。ぼくが暴走族だったら、特攻服の背中にこの文字を刺繍したい。そう思って語義を見たら「言葉が多い。多言」とあるだけだ。説明の言葉は少ない。実にあっさり、ちよつとがっかり。これじゃ特攻服の背中には入れられないな。「おしやべりなヤツです」といつているようなものなもの。

なぜ「龍」が4つで「多言」なんだろう。村上龍と坂本龍一と芥川龍之介と瀧澤龍彦が麻雀をやったらやかましい、ということなのか。「龍」の意味を見ると「たつ。りゅう」のほかは、「君。王者」「あきらか」「おおい」「高さ八尺以上の馬」「豪傑」「山脈のさま」などはあるが、言葉やしやべるという意味は見つからない。どこでどうしてこんな意味になったか。

「龍」が2匹の「2」という字もあるけど、こちらは「(1) 飛龍。(2) おそれる」と

いう意味だ。

同じ字を4つ並べて1つの字にするというのは、わりとよくあるパターンのようだ。たとえば「3」。「雷」が4つ。「ハウ」「ビヤウ」で、意味は「いかづちのおと」である。いかにもゴロゴロいってそう。

「4」は「風」が4つ。「ヒウ」「ヒユ」。これは台風か大嵐か、と思ったら、意味はたんに「かぜ」。おいおい、それなら1つでじゅうぶんだろ、といいたくなる。

「春」が4つの「5」もあるけど、これは義未詳とのこと。「シユン」。『大漢和』を読んでみると、意外と「義未詳」とある字が多い。書いた人はどんな意味を込めたつもりだったのか知りたい。

画数の少ないほうはどうだろうか。1画。「一」は知っているけど、同じように棒が1本だけの字で、縦棒のものもある。「6」だ。「ゴン」「シ」「ジヨ」「ニヨ」。ところがこの意味を見て驚いた。「すすむ。しりぞく」とある。どっちなんだ！「下から上に引けば、すすむ意となり、上から下に引けば、しりぞく意となる」とある。だが、どうすれば上から引いたか下から引いたかがわかるのか。そもそも『大漢和』のこの字は上から引いたものか下から引いたものか。それに、活版やオフセット印刷では、上から

引くも下から引くもないではないか。もしもこの字を、たとえば軍隊の指令書に使ったらどうなるだろうか。將軍が「もうダメだ、退却せよ」というつもりで上から下に引いた。ところが前線の隊長は「將軍は進めといつているぜ」と前進を続けて全滅、なんてことも起こりえるではないか。

「7」という字は、「一」が4つなのか、それとも「二」が2つなのか。「シ」と読んで、意味は「四」である。しかし「二」だつて、「一」が2つと考えれば、同じことか。

同じく1画の「8」は「右から左へまがる」見たまんまだ。「9」も1画で、こちらは「左から右へまがる」。ところが同じ1画でも「10」は「ながれる」なのである。「左から右へまがれ。右から左にまがるんじゃないぞ。川に落ちてながれるぞ」という文章をこの3文字を使って書くとき、よほど注意深く筆を使わないと犠牲者が出るだろう。

*

自分の名前の字について、どんな意味があるのか知りたい。ぼくの名前は「朗」。「あきら」と読む。『大漢和』を読んでびっぴりした。まず「朗」は「11」の略字なのである。略さないと偏へんは「良」。しかも本字は偏へんと旁ぼうが入れ替わった「12」だということである。自分の名前なのに知らなかった。

名づけた父と叔父も知っているだろうか。
 こんど母の四十九日の法要で会ったら、教
 えてあげよう。次から名刺は「12」でつく
 ろうかな。

意味は「(1) ほがらか。あきらか。(2)
 たからか。たからかに」。これは知っている。
 ぼくも、できるだけほがらかに、声を出す
 ときはたからかに、と心がけてきた。

偏と旁が入れ替わることは珍しくないよ
 うで、たとえば「13」は「14」と同じで、「エ
 イ」と読む。「高く吹く風のさま」だ。
 「15」もおもしろい。「正」の左右が反対だ。

龍龍龍 1

龍龍龍 2

雷雷雷 3

風風風 4

春春春 5

一 6

三三三 7

丿 8

人 9

乚 10

朗 11

娘 12

颯 13

颯 14

五 15



子どもが字を覚えるとき、鏡文字を書いてしまう段階がある。たしか、人間がものを見る時、本来は鏡像のように左右反対に見えているのだけれども、それを脳のなかで変換している。4、5歳はまだそのトレーニングの段階なのだと言達心理学の講義で習った（ような気がする）。ところがこの

「15」は「乏」の本字だというのである。「乏」を見ると「正の字の対」という意味があり「正の反対の形で、とぼしい義。正道に反するのは匱乏を招く道であるからいふ」とある。匱乏きぼうというのには貧乏のことだ。つまり「正」の反対の意味だから裏返したというわけ。

「16」と「17」。「兵」の下の点というか斜めの線を書きわすれたんじゃないの、それとも片足をなくした傷病兵？ と思っただら「遊技のピンポンの音譚。卓球」とのこと。二つ並べて、ピンポン、ピンポンという卓球のラリーをあらわす。

あきれたのは「18」。「と」という鳥の名前だ。「鳥」と「非」の組み合わせなんだけど、「非」が旁になったり（19）、偏になったりしている（20）。どれも意味は同じだ。こうなると、偏と傍の位置なんてどうだっ
ていいじゃないか、と大らかな気持ちになっ
てくる。漢字なんてものは、だいたい

合っていればいい。しんじょうの点が1つ
だ2つだ、「吉」の上が「土」だ「土」だ
なんて、どうでもいいじゃないか。両方O
Kということにしよう。

ちなみに「吉」は「よい」「さち」「めで
たい」などの意味。「土」じゃなくて「土」
のほうの「21」は「吉」の俗字だそうで、
つまり意味は同じだ。

「22」は「23」の俗字。「上は大水、下は
大火事、なーんだ」というなぞなぞを思い
出す。もっとも、いまは風呂も給湯器でわ
かすから、こんななぞなぞは通じない。ああ、
五右衛門風呂がなつかしい。「23」を見る
と「24」と同じだとある。災害の「災」、
わざわいである。

この「22」の上下が逆になった字がある。
「25」。上が「火」で、下が「水」だ。なぞ
なぞとしてはかなり難しい。水の上に火だ
なんてマジックか。読みは「トツ」とこ
ろが残念ながら「義未詳」だそうだ。

*

魚偏の文字というと寿司屋の湯飲み茶碗
である。『大漢和』にはいやというほど載っ
ている。まるで水族館のようだ。

「26」は「ギョ」「ゴ」とあり、「魚がつ
らなりゆく」「大きい魚」という意味。な
るほど連なっている。じゃあ、「27」は魚

が横に広がって進んでいるのか、魚のフラ
ンス・デモカ（全共闘世代の皆さん、なつ
かしいでしよう？）と思いきや、これも「義
未詳」とのこと。「セン」「ソ」だそうだ。

「魚」が3尾、4尾になった字はないのか。
誰もそう思うだろう。もちろんある。
「28」は「セン」と読み、「あたらしい。魚
があたらしい」「すくない」という意味。

「29」は「ゲフ」「ゴフ」で「魚がさかん
さま」。

*

「30」はカタカナの「ム」ではなく、「シ」
と読む。「わたくし」、そう「私」と同じだ。
「ボウ」「モ」と読めば「なにがし」「某」
の意味になる。

「私」には「わたくし」以外に「いね」「ひ
そかに」「愛する」「小さい」などのほか、「小
便」「姦通」「陰部」なんていう意味がある。
知らなかった。

ところが「30」を重ねた「31」は、「30」
とまったく関係ない「幻」の古字で、「ゲン」
と読む。横に並んだ「32」も、これまた
「30」とは関係のない「33」の古字で「リン」。
じゃあ3つ集めた「34」はというと、「ルキ」
と読んで「かさねた土くれ」。4つ集めた
「35」は「イウ」で「36」と同じなのだそ
うだ。それぞれほとんど関係がない。

「小」が集まるとどうなるのだろう。仮説1、「塵も積もれば山となる」というように、「小」がたくさん集まれば「大」になる。いや、「大」はむりとしても、せめて「中」くらいなら。仮説2、「小」がますます小さくなる。0.1と0.1を足して0.2にするのではなく、0.1と0.1を掛けて0.01になる。仮説1が足し算の発想なら、仮説2は掛け算の発想だ。漢字はどうか。

驚いたことに「小」を2つ組み合わせた漢字はない。少なくとも『大漢和』には載っていない。なんだか残念だ。「少」と「小」を組み合わせた「37」はあるが、説明を見ると「米」の古字だそうだ。「ベイ」と読む。3つならあった。「38」と「39」である。どちらも「マ」と読み、「40」の古字だそうだ。「40」は「41」の俗字で、「こまかい」「かすか」という意味である。どうやら仮説2のほうが正しかったようだ。しかし「小」が4つの「42」は「小に同じ」。だったら、わざわざ4つもくつつけるなよ。

*

笑ったのは「43」である。視覚的インパクトはすごい。ちよつと禍々しい感じもする。呪いがこもつていそう。しかしよく見ると、草かんむりと四角い枠の中に「木」が9本。「園」「庭」という意味である。な

んだ、そのまんまじゃないか。わりとほのぼのした意味なので安心した。

気味が悪いといえど、「44」や「45」である。舌がいつぱい。長い舌を口から何本も出した妖怪が、ペロペロと舐める様子を想像してしまふ。ところが意味を読むと違う。「44」は「クワ」で「たばかる。言をひるがえす」「ゲ」と読むと「話」。「45」は「話」の古字だそうだ。「舌」が2つの「46」もあるけれども、こちらは義未詳。

漢字のなかには、文字というよりも、たんに記号としか思えないようなものもある。いや、文字と記号はどう違うのか、文字も記号の一部ではないかといわれると困るが……。たとえば「47」には「点」のほかに「ともしび」という意味もある。ところがこれが3つ集まった「48」は「梵字の伊の字」なのだという。

「49」は「チウ」とある。「丑」と同じ意味だが、横棒の間にあるのが点ではなくて黒丸なのが不思議だ。漢字のパーツに黒丸なんてあったっけ？

書き写そうとしてうまく書き写せなかったのが「50」。なんだかいろんなパーツがごちゃごちゃに組み合わさっている。「51」の本字だそうで、「51」を見ると、楽器のひちりきのことだとある。うちの近所

に笛の上手な東儀さんという人がいるけど、こんど「この字、知ってますか？」と聞いてみようか。

今のところいちばんのお気に入りには「52」だ。「ギユウ」「グ」。「おろか」という意味だそう。土の上に口が6つも並んでいる。ビジュアル的にも、いかにもこれは愚かだよね。龍が4匹もいる「1」よりも、「52」のほうがはるかに愚かそうではないか。6つ並んだ口は、歯を剥き出しにして笑っている顔のように見える。ぼくのシンボルマークにしようかな。



永江朗 (ながえあきら)

一九五八年北海道生まれ。法政大学卒業。洋書店勤務の後、雑誌の編集者を経て執筆業に転身。この三月まで早稲田大学文学部教授。主な著書に、『批評の事情』(筑摩書房)、『セゾン文化は何を夢見た』(朝日新聞出版)、『広辞苑の中の掘り出し日本語』(ハジリコ)ほか。

【𠂔】

49

【𠂔】

45

【麼】

41

【𠂔】

37

【𠂔】

50

【𠂔】

46

【𠂔】

42

【𠂔】

38

【𠂔】

51

【𠂔】

47

【𠂔】

43

【𠂔】

39

【𠂔】

52

【𠂔】

48

【𠂔】

44

【麼】

40



合計3万6千部の人気シリーズ。『広辞苑の中の掘り出し日本語』と『広辞苑の中の掘り出し日本語②男と女の日本語』（ともにバジリコ）